

最後の本

生きる...!

自らを終わらせるために書かれた本。

Leo Vance

序

終わりがっている本

これは、ただ一つの野心をもつ本だ。終わること。

最後のページで終わることではない。あなたの中で終わることだ。

この本はあなたの人生を良くしようとはしない。意味を手渡しもしない。ある信念をより新しい信念に取り替えもしない。本は五千年のあいだそれをやってきて、頭は重くなる一方だった。

この本がしたいのは、ならすことだ。

人間の頭は途方もない積荷を運んでいる。名前。規則。道徳。神々。過去。未来。理想。恐れ。定義。希望。そのほとんどは選ばれたものではない。積み込みを見られる年齢になる前に、積み込まれていた。

それからあなたは何年もかけて、その積荷を「自分」と呼んできた。

人間の大きな難しさは、学ぶことではない。学びほどこことだ。

この本は学びほどきの手引書ではない。手引書なら、運ぶものが一つ増えるだけだ。

これは木だ。

風の中に立つ、大きな木。

風が吹く。木は言い返さない。ただ立つ。その後ろで、ものごとは静まっていく。

最後のページが来たとき、あなたの中は減っているはずだ。増えているのではなく。

この本が仕事を果たせば、あなたはこの本を覚えている必要がない。

読むのをやめてしまってもいい。

それが正しい終わり方だろう。

本が終わる。すべてが人生になる。

I

山羊は言う——草

山羊に、世界とは何かと尋ねてみる。

草。

それで哲学は完結している。山羊は食べる。それから休む。山羊の中に、説明を待っているものは何もない。

山羊は草に意味があるかを問わない。食べることが神聖かどうかを決めない。日なたに寝そべる前に、幸福の定義を必要としない。

それは生きている。

単純に聞こえるのは、単純だからだ。人間は単純さを怪しいものにしてしまった。

自分たちと、いま起きていることとのあいだに、私たちは言葉を詰め込んだ。言葉は役に立つ。水がどこにあるかを他人に告げる。火を警告する。子が母を呼べるようにする。

それから言葉は育ちつつける。

語は歴史をもつ。歴史は規則をもつ。規則は制度になる。制度は文化になる。文化はアイデンティティになる。アイデンティティは、人がそれを守って死ぬものになる。

音が壁になる。壁は、そのために殺せるほど現実になる。

山羊は一度も壁を建てなかった。

言葉が悪いのではない。厄介は、語がものそのものと取り違えられたときに始まる。

草は草だ。草という語は誰も養わない。

人生という語は人生ではない。

自由という語は自由ではない。

沈黙という語——それには後で触れる。ほかのどれよりも空っぽだ。

では、純粹という語は？

その語を、私は持っていない。

それは人間が言えるもっとも澄んだ文の一つかもしれない。言葉が失敗したからではない。ときにそこへ置くものが何もないからだ——そして正直な頭は、その場所を空けておく。

ここでもう一つ壁が倒れうる。「現実」と「非現実」。粒か、それがなる花か——どちらがより現実か。問いが壊れている。一方を現実と呼んだ瞬間、あなたは非現実を発明したのだ。自然はその分割を一度もしていない。それをしたのは口だ。

言葉より前

子どもは図書館より先に到着する。

宗教より前。道徳より前。国籍より前。美より前。成功と失敗より前。誰にならねばならないかという物語より前。

それから本が始まる。

紙の本ではない。人が本だ。親が本だ。教師、隣人、画面、慣習、罰、褒美——すべて本だ。子どもは、読書が始まったことを知らないまま、それらを読む。

言葉より前の子どもは真実に近いのか。もちろん近い。秘密の知恵からではない——棚が空だからだ。

死の恐れもそうやって、早くに届く。発見としてではなく、空気として。私は二歳になる前にそれを見た。顔つきが変わる。声が落ちる。体が消え、大人たちが自分の恐れを演じる。のちには同じ恐れが言葉そのもののの中に、文化が死をめぐる築いたあらゆる言い回しの中に座っている。

私は死を恐れて生まれたのではない。手渡されたのだ。他の者に手渡されるのも見てきた——いつも手渡され、育ったことは一度もない。

神も同じように届く。私にとって、神という考えは十三から二十五まで巨大だった。入ってきた部屋をすべて満たした。

それから別の種類の本が来た。それから見るものが来た。人生がすることをするのを、何年も見ていた。

四十のころ、すべてがはっきり立った。

私が意識して信じるのをやめた最初のものは、床そのものだった。私たちはものごとの底で暮らしているという感覚。そうではない。地面は足の下にあり、ほかのすべては上にある。開いている。誰も私たちの上に積まれてはいない。

受け継がれた考えは、まさにその思い込みのように働く。見えなくなるのだ。人は、短い文を言い終える前に自分の中へ置かれたものだと気づかないまま、一つの考えを四十年守りつづけられる。

これは親への告発ではない。彼らもまた積まれていた。その親たちもだ。文化は人間の口を通して自分を先へ渡していく。

子どもを台無しにするものに、風変わりなところは何もない。受け渡された文化だ——学ばれ、それから手渡される。私も数歳で台無しにされた。みんなと同じように。

ある日、育った子どもが自分の頭の中身を見渡して言う。私、と。

そのうちどれだけが私なのか。

大いなる棚卸し

大きな語を外に出して、一つずつ見る。日の光の下で。攻めるためではない。量るために。

神。歴史がすでに量った。人類は何千もの神を崇めてきた。それぞれに神殿があり、供物があり、まったく確信した信者がいた。確信は完全だった。それでも神々は去った。

死後の生、生前の生。人間が揃って重要だと認める、もっとも役に立たない二つ。およそ千億人が生きて死んだ。確認された報告はゼロ。それでも文明まるごとが、後と前を軸に週を組み立てる。そのあいだ、真ん中——実際に起きている唯一の部分——は待たされている。

愛。愛は希望だ。何も欠けていないのに、なぜ希望するのか。

美。もちろん作りものだ。文化がそれをどう着るか見るといい。ある文化は芸術として演じ、別の文化は流れ作業で製造する。美が事実なら、工場は要らないはずだ。

幸福。作りものの目標だ。野でそれを追いかけたものは一つもなく、野でそれを恋しがったものも一つもない。

自由。これが奇妙なものだ。自由の感覚を求めてみる——考えではなく、感覚を——すると何も応えない。人生も、生きることも、その語を担いだことがない。自由とは闘いの総称だ。渇きが、水を与えられない場所にだけ存在するのと同じように。人は自由になりたいと言う。それを支払える者に、私は多く出会っていない。自由からの後退は、子どもが一文を言えるようになる前に始まる。

孤独と独りでいること。孤独とは、何も見つけなかった希望だ。独りでいることは、その感覚との闘いだ。どちらも頭の中に住む。どちらも野には住まない。

沈黙。沈黙は存在しない。どの動物も音を出す。伸びをするときのああ、うまい餌でのうん、痛む背中でのおお。夜の森は管弦楽だ。「沈黙」は私たちの言葉の中にだけある——自然が一度も生み出さなかったものを指す語だ。

神聖。作りものでない神聖なものはあるか。ない。何も。その答えが痛まなくなった瞬間、肩から重さが降りる。

この棚卸しは破壊ではない。現実のものは、見つめられたくらいで壊れはしない。日の光からの保護を必要とするのは、作りものだけだ。

口に詰め込まれたもの

心の苦しみは、自らを必要なものとして差し出す。深さとして。魂の証拠として。

それが実際に何を守っているのかを問うてみる。

何も。何も守っていない。

それは、あなたが口を開けて眠っているあいだに詰め込まれたものだ。あなたは囓みながら目を覚まし、その囓むことが最初の記憶より前からあったので、それを自分自身と呼んだ。

詰め物には味がある。罪悪感。恥。後についての心配。前についての心配。何年も前に終わった時期の再生が、夜になるとまだ回る。

その再生は、私がまだ完全には手放しきれていない最後の握りだ——過去が古い回を流しつづけている。これを書いている木がまだ風の中に立っていると、あなたに知っておいてほしいから言う。違いはこうだ。私はそれが再生だと知っている。再生だと知ることが、もう半分は吐き出しているということだ。

心の苦しみを本当に持たない存在に会ったことがあるか。ある。羊の群れだ——その一頭一頭。食べる。それから休む。それが伝記のすべてで、それは傑作だ。

羊は、人間がそう生きられるという証拠ではない。羊は積荷を持ち上げられないから、下ろすこともできない。あれは別の動物だ。

羊が証すのはもっと小さく、そして十分だ。囓むことは草の中にはない。あとから詰め込まれたのだ。

人間のあいだでは——まだ一人もいない。これを書いている頭も含めて。

最初の一人は、この本を読み終えた誰かかもしれない。

解くこと

作るのはたやすい。頭は作るようにできている。静かな午後を一つ与えれば、頭は信念を、心配を、神を、恨みを作る。

病は作ることにあったのではない。

病は、解けないことにある。

私は道徳を解いた。天国を解いた。地獄を解いた。完全に消えた——塗り直したのでも、名を変えたのでも、軽い版に取り替えたのでもない。消えた。

十五年ほどかかった。

一つあたり十五分で取り付けられたものに、十五年。それが交換レートで、誰もそれを警告しない。取り付けは無料。取り外しは年数がかかる。

だからこの章は週末の奇跡を約束しない。解くことは、消化が遅いのと同じ意味で遅い——静かで、ほとんど見えず、感じるものが何も残らなくなって初めて終わる。

何かが本当に解けたと、どうしてわかるのか。それが文の中に現れなくなる。次に、沈黙の中にも現れなくなる。ある日、その語自体がよそよそしくなっているのに気づく。焼け落ちた学校の同級生の名前のように。

いま、語が私を去りつつある。語彙が滑り落ちていく——どのみち本当には触れたことのなかった語たちだ。私は追いかけない。去っていくことが領収書だ。

では、先にここを歩いた思想家たちは。そのうちの一人は、神という考えは働かなくなったと書き、その一文の代価を正気で払った。私は彼に個人的な借りはない。同じかまどで料理をしたことは一度もない。その人に従うことが要点だったことは一度もない。要点は方向だった——そして方向はこうだ。より少ないほうへ。

自然は私たちの許可を要らない

文明から何を残すか。人生。自然。ほかは交渉の余地がある。

自然は二つの動詞で動く。食べる、休む。あとはすべて注釈だ。

死ぬのを見てきた。植物。動物。人。それを見るのは昼食をとるようなものだ。この一文が衝撃なのは、死を破局として教え込まれた頭にだけだ。野では、死ぬことは人生のごく普通の帳簿づけだ——歩くように、小便をするように、息をするように。草は粒のために式典を開かない。

死を恐れるか。もちろん恐れない。でなければ、なぜ『最後の本』という題の本を始めるだろう。

生きているとはどんな感じか——頭ではなく体で。空腹。座りすぎたあとの痛み。哲学の付いていない、体からの報告。

私が生きたもっとも正直な瞬間は、これだ。いま。それは正直だった唯一の瞬間だ。ここにある唯一の瞬間だからだ。

頭がもっとも澄んで考えるのはどこか。自然の中で。都市は広告で考える。

あるとき、半ば凍った山の川の淵に飛び込んだ。意味が完全に溶けた——そしてそれは壮麗だった。冷たさは議論しない。数秒のあいだ、私の中に語彙はまったくなく、生きていることで燃える体だけがあった。それがすべての語の下にある状態だ。失われたことは一度もない。ただ紙で覆われていただけだ。

その日の生きるぶんを稼ぎ、生のものが来るとき——言葉より前の状態が来るとき——私は歩く。歩くことは何も問わない。

文明から一つだけ取り除けるとしたら、武器でも機械でもない。

余分な語だ。

法にしまえばいい。二百ページより厚い辞書は認めない、と。

二百ページには、水、火、パン、母、痛み、眠り、雨、来い、行け、はい、いいえが収まる——人が二人、たがいを生かし温めるのに要るものすべてだ。二百ページより先はすべて装飾で、厄介が湧くのは装飾の中だ。パンという語のために戦争をした者は一人もいない。戦争は分厚い後半のページに住んでいる——栄光、純粹、宿命、名誉の中に。

薄い辞書なら、それらを飢えさせるだろう。

これは言葉への憎しみではない。言葉のための食事療法だ。言葉は道具として始まり、家主にまで膨らんだ。道具は取り上げて置く。家主はあなた自身の頭に家賃を課す。

このページのどこかで、語はもう痩せはじめている。よろしい。この本は自らを一ページずつ焼く辞書だ。残るものが、それに従って生きられるほど短くなるまで。

食べる。休む。歩く。見る。生きる。

VIII

ただ生きる

人間にできるもっとも勇敢なことは何か。

登ることではない。戦争ではない。舞台ではない。

ただ生きること。

後も前もなく生きること。天国の拍手もなく、地獄の鞭もなく。一度も開いたことのないパラシュートのように背に縛りつけた意味もなく。

それがもっとも勇敢なのは、すべてがそれに逆らって建てられているからだ。学校、寺院、市場、画面——どれもあなたの先延ばしで動いている。彼らはあなたに、後のために生きてほしい。彼らに売れない唯一のものが、いまだ。いまは一度も欠けたことがない。

羊は拍手なしにそれをする。食べる。休む。人間は牧草地のまわりに手帳を持って立ち、羊が何を持っているのかについて理論を書く。

羊は何も持っていない。

それが、羊の持っているものだ。

そして違う——この本はあなたに家畜になれとは言っていない。手を、パンを、人を、仕事を、そのまま持っていればいい。落とすのは積荷だけだ。手は、それなしのほうがよく働く。

最後の本

この本は誰のためのものか。平均的に本を読む読者と、それ以上の人のためだ。図書館に一度も入らなかった人の助けにはなれない——朝食のペーストのようにパンに塗ってやっても、入っていかないだろう。置く喜びを感じるには、本を運んだことがなければならない。

私のためのものか。いいや。書いても私の中は何も変わらなかった。変化が先に来た。書くことはただ報告しているだけだ。ここに書かれた何も恐ろしくはない。脅かされるものは、私の中にもう残っていない。

この本は大きな木だ。風の中に立ち、その後ろでものごとが静まれるようにする。静められ。落ちてき。動かず。

それから、この本の本当の野心が来る。それ以前のどの本も守ろうとしなかったもの——最後の一冊であること。

この本の中で最後に燃えるべきものは、この本自身だ。読み終えたら、道徳や天国や地獄と同じ道を行かせてやればいい。引用しないこと。頭の棚に並べないこと。この本の上に何も建てないこと。覚えられたがる本は、自分の第一章ですでに失敗している。

閉じたときに、読むのをやめたいという衝動を感じたら——何であれ、永久に——その衝動と闘わないこと。

その衝動こそ、この本が働いているということだ。

文の途中で人生に呼ばれたなら、文の途中で置けばいい。山羊は段落を読み終えない。

生きる...!

神は去っていい。道徳も去っていい。美も、自由も、幸福も、純粹も、沈黙も、意味も——すべて去っていい。

辞書は薄くなっていい。

過去は、起きた場所にとどまっていい。現在はその許可を要らない。未来は、着く前に解かれる必要がない。

人は探すのをやめていい。なろうとするのをやめていい。読むのをやめていい。

そしてただ生きればいい。

哲学としてではなく。目標としてではなく。達成としてではなく。

人生は、人生という語を必要としたことが一度もない。

だから——本を閉じよう。

見る。歩く。食べる。息をする。休む。

生きる...!